
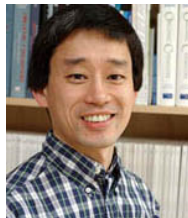



Mukaiyama Award受賞者のご紹介

公益社団法人 有機合成化学協会

本会では、有機合成化学および関連分野において顕著な学術的業績、産業的發展を達成した個人、団体を顕彰しています。

Mukaiyama Awardは、特に有機合成化学に関する方法論の開拓に寄与した若き研究者を顕彰するとともに、さらなる活躍にエールを送っています。

回	授賞年度	受賞者氏名	授賞時の所属
1	2005	 Alois Fürstner	マックスプランク研究所教授 メタセシス反応をはじめ、遷移金属錯体を用駆使した新規な有機合成反応を数多く開発し、さらに、それらの反応を駆使して、さまざまな生理活性物質の効率的な全合成を達成しました。
2	2006	 Gregory C. Fu	マサチューセッツ工科大学教授 Pd, Ni触媒を巧みに使い、不活性なハロゲン化アリール、クロスカップリングのハロゲン化アルキルを反応基質として用いることを可能とし、さらにそれを不斉触媒反応に展開しました。また、新規な遷移金属錯体触媒、面性不斉を有する有機分子触媒などを開発しました。
		 杉野目 道紀	京都大学教授 有機ホウ素化合物や有機ケイ素化合物の触媒的な合成反応（ビスシリル化、シリルホウ素化、シアノホウ素化など）を開発し、様々な有機合成反応へと展開しました。また、らせん構造を持つ高分子化合物にも成功しました。

回	授賞年度	受賞者氏名	授賞時の所属
---	------	-------	--------

3 2007



David W. C. MacMillan プリンストン大学教授

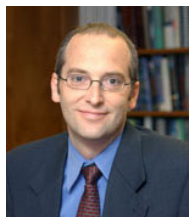
不斉触媒能を有する新たな有機小分子を設計・開発し、「有機分子触媒」の概念を提唱したパイオニアの一人です。「イミニウム触媒反応」、「有機分子を用いたカスケード反応」、「SOMO触媒」などの新概念を次々に提唱し、新分野を開拓しています。



谷野 圭持 北海道大学教授

複雑な縮環骨格上に多様な官能基を備えた高次構造天然有機化合物を研究対象とし、それらの全合成に必要な高選択的かつ高効率の合成手法の開発を行っています。主な成果として、形式的付加環化反応による炭素環構築法の開発および、それらを鍵工程とするコリオリン、インゲノール、ゾアンタミナルカロイドの全合成などがあります。

4 2008



John F. Hartwig ペンシルバニア大学教授

金属触媒を用いる斬新な有機合成反応の開発をテーマとする、世界的に著名な研究者です。いわゆるBuchwald-Hartwig クロスカップリングの開発により一躍有名になりました。この反応は、世界中で広く使われる反応の一つとなっています。



野崎 京子 東京大学教授

独自の光学活性配位子で修飾した遷移金属触媒を用いるアルケンの不斉ヒドロホルミル化やアルケンとCOの交互共重合の開発などが著名な研究テーマです。近年はエポキシドとCO₂との不斉交互共重合体を初めて合成しています。

回 授賞年度

受賞者氏名

授賞時の所属

5 2009



Justin Du Bois

スタンフォード大学教授

主なテーマは新規方法論に基づく天然物の全合成研究であり、二核ロジウム触媒を用いたC-Hアミノ化を鍵として、テロドトキシンやサキシトキシン、マンザシジンなど、合成困難な天然物を斬新な経路で合成しています。



石原 一彰

名古屋大学教授

環境保全型の実用性と汎用性を備えた触媒的立体選択的有機反応及びバイオミメティックカスケード反応の開発研究を行っています。主要課題は多様な機能を持つ酸塩基複合触媒の設計です。

6 2010



Michael J. Krische

テキサス大学オースチン校教授

天然物合成に関連した新しい合成反応の開発に活躍しています。遷移金属錯体を用いた、水素移動の介在する不斉触媒的炭素-炭素結合反応などを精力的に開発し、複雑な天然物の斬新な全合成へと展開しています。



寺田 眞浩

東北大学教授

効率的かつ高選択的な物質変換反応の開発を目指し、有機分子触媒ならびに遷移金属錯体触媒の設計開発とそれらを用いた反応開発に取り組んでいます。

回	授賞年度	受賞者氏名	授賞時の所属
7	2011		Dean Toste カリフォルニア大学バークレイ校教授 金触媒を基盤とするユニークな変換反応を見出しています。また、キラル対アニオンを用いた触媒的不斉合成反応においても先駆的な研究を行い、不斉フッ素化反応等、数多くの注目すべき成果を発表しています。
			垣内 史敏 慶應義塾大学教授 一般に不活性といわれる炭素-水素、または炭素-ヘテロ元素結合を効率よく切断し、目的とする化学修飾を高い選択性で実現するための触媒の開発、および方法論の確立に先駆的な業績をあげています。
8	2012		Jin-Quan Yu スクリプス研究所教授 触媒的C-H結合活性化の分野において顕著な成果を挙げました。配位性置換基の弱い相互作用を利用し、活性化の難しい数々のC(sp ³)-H結合活性化を達成し、その複雑な生理活性物質の全合成も達成しました。
			田中 健 東京農工大学教授 ロジウムをはじめとするキラルカチオン性遷移金属錯体触媒を用いて、新規なエナンチオ選択的付加環化反応及び芳香環構築反応を開発しました。これらの新規有機合成プロセスにより、触媒的かつエナンチオ選択的な軸不斉、面不斉、螺旋不斉の構築を可能となりました。

回	授賞年度	受賞者氏名	授賞時の所属
9	2013	 Benjamin List	マックスプランク研究所教授 プロリンを用いた分子間アルドール反応をはじめ、有機分子触媒を用いた不斉合成反応の分野における先駆者の一人です。新たな有機分子触媒、ならびに有機分子触媒反応を精力的に開発しています。
		 伊丹 健一郎	名古屋大学教授 新概念触媒による革新的な合成手法（特にC-Hカップリング）を開拓し、数々の医農薬関連分子、生物活性天然物、光電子機能性材料、新規ナノカーボン類の創製に成功しました。特に、芳香環連結分子の合成化学と応用研究に大きなブレークスルーをもたらしました。
10	2014 (予定)	 Phil S. Baran	スクリプス研究所教授 C-H結合の活性化など反応などを開発し、独自の合成戦略によって、きわめて複雑な構造を有する天然物の全合成に成功しています。弱冠36歳の気鋭研究者です。
		 井上 将行	東京大学教授 合成効率を飛躍的に高める数々の独創的な合成方法を開発し、特異な生物活性と複雑な構造をもつ環状ポリエーテル、エンジン、テルペンおよびペプチド類の全合成を可能としています。特に、代表的な環状ポリエーテルであるシガトキシン類やペプチド系天然物で最大の分子量を持つポリセオナミドBの世界初の全合成が有名です。

Mukaiyama Award 表彰事業の波及効果

大学企業の若手研究者にとって貴重な経験の場を提供しています

- 受賞者は年度ごとに45歳以下の国内研究者1名、海外研究者1名としています
- 毎年夏に2泊3日で開催される「有機合成化学セミナー」において、表彰式と受賞講演が行なわれます（授賞条件）
- 各受賞者はアクティビティの高い多忙な研究者で、講師招聘は容易ではありません。本賞あってこそ、このような研究者の講演を身近に聴講でき、宿泊先で親しく語り合える貴重な場を提供しています。
- 「有機合成化学セミナー」には、例年60～70名の企業研究者が参加しています。普段では経験できない研修の場を提供しています。